

問いかけ性を持たない反語形式  
「か」「ものか」の文脈における用法

松下 光宏

The Usage in context of the Rhetorical Question form  
without interrogative nature *ka* and *monoka*

MATSUSHITA Mitsuhiro

神戸医療未来大学紀要 第23巻 第1号

(令和4年12月)



<原著>

問いかけ性を持たない反語形式  
「か」「ものか」の文脈における用法

松下 光宏

The Usage in context of the Rhetorical Question form without interrogative nature *ka* and *monoka*

MATSUSHITA Mitsuhiro

This paper reveals the difference between the rhetorical question form without interrogative nature *ka* and *monoka* from the perspective of the usage in context. The assertion are as follows.

1. *Ka* is used to show the speaker's recognition that the action or utterance of the person concerned is unthinkable, and to criticize the action or utterance. *Monoka* is used to disapprove of the establishment of the event that the person concerned informs, or that the speaker himself imagines.
2. Either *ka* or *monoka* can be used when it is possible that the speaker can disapprove of establishment of the event and criticize the action or utterance of the person concerned, which is unthinkable.

**Key words** : rhetorical question, *ka*, *monoka*, interrogative nature, usage in context  
反語、「か」、「ものか」、問いかけ性、文脈

## 1. はじめに

反語とは疑問文で問いかけることによって聞き手や読み手が当然認識しているべき内容を再認識させるもので、反語的な解釈は肯否の反転によって生じるとされ、反語的な解釈を持つ疑問文の形式には、「か」「のか」、自問的な「だろうか」、反語の解釈が固定した「ものか」、そのほか「と思うか」「というのか」といった形式があるとされる（日本語文法学会（編）2004：510-511、執筆者安達太郎<sup>1)</sup>）。このうち反語の解釈が固定した形式というのは聞き手や話し手自身への問いかけ性を表す

ことがないものであり、この反語の解釈が固定した形式として「ものか」以外に「てたまるか」を認めている研究もある（日本語記述文法研究会（編）2003：51<sup>2)</sup>、案野2014<sup>3)</sup>、井上2021<sup>4)</sup>）。

(1) の文は問いかけ性のある反語と解釈ができるが、(2) の「ものか」で表された文は問いかけ性のある反語と解釈できない。

(1) そんなことを言う人がいるか。（文末上昇イントネーション）

(2) そんなことを言う人がいるものか。

反語の解釈が可能で、真偽疑問文や補充疑問文の形式「か」をとるもののなかには、問

き手への問いかけ性を失って「ものか」に近い反語解釈になるものがある（安達1999<sup>5)</sup>）。下の(3a) 真偽疑問文、(4a) 補充疑問文、(5a) 全量否定の解釈となる文の「か」は問いかけ性がなく、それぞれ(3b) (4b) (5b) の「ものか」の形式に置き換えても、ほぼ同様の意味にとることができる。

- (3) a. そんなことを言うバカがあるか。  
 (文末上昇イントネーションをとらない)
- b. そんなことを言うバカがあるものか。
- (4) a. そんなこと誰がするか。
- b. そんなこと誰がするものか。
- (5) a. こんなところへ二度と来るか。
- b. こんなところへ二度と来るものか。

では、聞き手への問いかけ性を持たない真偽疑問文や補充疑問文の形式「か」と「ものか」はどのような違いがあるのだろうか。反語解釈は肯否の反転によって生じるという特性からすると、1文のみではほぼ同様の意味になり、その違いはわかりにくい。本研究では、反語解釈のなかで問いかけ性を持たない「か」と「ものか」（異形態「もんか」「ものですか」「もんですか」を含めた代表とする）を対象とし、それぞれの形式が文脈のなかでどのように用いられているのかを分析することにより、その違いを明らかにする。1文レベルで違いが見えにくい類義形式の相違点は文脈での用いられ方に現れ、そこからそれぞれの形式の特徴を導くことができると考えるためである。

具体的な方法として、「か」「ものか」に前接する語、「Pか」「Pものか」の1文の直前、直後（「Pか」「Pものか」と連続するひとまとまりの発話内とする）に出現する表現を調べ、そこから両形式が文脈のなかでどのように用いられるのかを分析することにより、両形式の違いを論じていく。

本稿は以下、次のような構成をとる。まず、2節で先行研究について述べた後、3節で「か」「ものか」に前接する語や「Pか」「Pものか」の1文の直前・直後に出現する表現を調査し、「か」「ものか」の文脈における用法について予測を立てる。そして、4節、5節で、3節の調査をもとに「か」「ものか」の文脈における用法の分析を行う。6節で「か」「ものか」の置き換えが可能になりやすい場合について述べ、最後に7節でまとめを行う。

## 2. 問いかけ性を持たない反語形式についての先行研究

問いかけ性を持たない反語形式については、国立国語研究所(1951)<sup>6)</sup>、松村(編)(1971)<sup>7)</sup>、山口(2004)<sup>8)</sup>、塩塚・江口(2006)<sup>9)</sup>などで「ものか」の1形式のみの意味の記述が中心となってきた。そうしたなかで、複数の問いかけ性を持たない反語の形式について記述した研究には、「か」と「ものか」について記述した安達(1999)、「てたまるか」を1つの固定した形式として「てたまるか」「ものか」について記述した日本語記述文法研究会(編)(2003)、案野(2014)、井上(2021)がある。以下、前者については2.1で、後者については2.2で、その記述内容を概観し、問題点や本研究との違いを述べる。

### 2.1 「か」「ものか」を記述した研究

安達(1999)は真偽疑問文「か」の反語解釈には「ものか」に近い反語解釈となるものがあることを指摘している。(6)の真偽疑問文「か」の反語文の例を挙げ、(7)のように「ものか」で置き換え可能であることを示している。(6)については「(聞き手に<反語解釈>を導き出させるための根拠として機能しておらず)聞き手にその主張を納得させるための

根拠として機能している」と説明している。

(安達1999、(45))

- (6) 「どうしてふたりで力を合わせないんです。ほくにはふたりがいつまでも平行線をたどっているほうが、はるかに不可解です」

「お互い人を信じなかったからここまでやってこられたんだ。四十年も五十年もそういう生き方しかできなかった人間が、いまさら簡単に宗旨を変えられるか」

- (志水辰夫『あした蜚蜉の旅』、安達1999(11))

- (7) 四十年も五十年もそういう生き方しかできなかった人間が、いまさら簡単に宗旨を変えられるものか

(安達1999(11)')

そして、問いかけ性を持たない「か」と「ものか」の違いについてそれぞれ(8)(9)のように説明し、その例として(10)を挙げている。

- (8) 【「か」について】

真偽疑問文、補充疑問文の形式「か」の反語解釈(問いかけ性を持つものも含む)は「一般性への志向」という特徴を持つ。それゆえ、可能動詞・存在動詞が多く用いられ、過去形を用いてよい場面で非過去形が用いられる。その「一般性の志向」という特徴から特定の事態には用いることができない。

- (9) 【「ものか」について】

「一般的な認識を媒介に特定の事態に対して<反語解釈>を派生する」という特徴を持つ。それゆえ、過去形には接続せず、特定の事態にも用いることができる。

- (10) 「それで、彼は出された料理をたべたの？」

「a. 食べるもんか / b. ?? 食べるか」

しかし、この(10)については次の(11)のように主体が1人称「私」であれば不自然ではなくなり、「か」も特定の事態で用いることができるように思われる。

- (11) 「それで、あなたは出された料理をたべたの？」

「a. 食べるもんか / b. 食べるか」

また、(8)(9)の説明は「か」「ものか」がどのような事態について使用可能かというものとどまっておき、両者が文脈においてどのように用いられるかといった違いには言及していない。(10)(11)のような主体の人称の違いにより使用の可否が異なる現象の解明にも、話し手の感情・感覚を表すという表出的な性質を伴うかどうかの判定が必要となるため、「か」「ものか」の文脈での用法を分析することが求められると言えるだろう。

## 2.2 「てたまるか」「ものか」を記述した研究

日本語記述文法研究会(編)(2003:51)、案野(2014)、井上(2021)は「てたまるか」を反語解釈が固定化した、すなわち、問いかけ性を持たない1つの形式として「ものか」と同様に扱い、それぞれの意味を述べている。しかし、問いかけ性を持たない「か」についての言及がなく、このような扱いでは問いかけ性を持たない反語解釈の全体を対象として分析を行うことはできない。

この「てたまるか」については、本研究では反語形式として扱わず、「たまる」または「てたまる」を「か」「ものか」に前接する1つの語または形式として扱う。そして、「か」と「ものか」を、問いかけ性を持たない反語形式として分析の対象とする。その理由は「か」が「ものか」と同様に終助詞として機能し、統語的に「てたまるか」「てたまるものか」のように接続した形式が存在するからであり、また、

1節の例文 (3) (4) (5) のように1文単位では真偽疑問文や補充疑問文、全量否定の解釈となる文の多くで「か」と「ものか」の置き換えが成立するからである。

### 3. 調査－「か」「ものか」の使用文脈に出現する語・表現－

この節では、問いかけ性を持たない反語形式「か」「ものか」に前接する語、そして、「Pか」「Pものか」という1文の直前・直後に出現する表現を調べる。前者の調査は述語の出現傾向から、後者の調査は文脈の流れから、「か」「ものか」の文脈での用法の分析に有益である。

分析データには『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）<sup>10)</sup> を用い、そのうち出版・書籍、図書館・書籍、特定目的・ベストセラー、特定目的・ブログ、特定目的・知恵袋のみを調査対象とする。これは本研究が対象とする反語形式が自然会話よりも小説の会話文や地の文、ウェブテキスト上のやりとりなどで多く用いられると考えられるためである。コーパス検索アプリケーション「中納言」により検索し<sup>11)</sup>、誤抽出と問いかけ性がないかどうかの確認を目視で行った結果、「か」については241例（動詞の語241例、名詞・形容動詞・形容詞の語は前接しない）、「ものか」については651例（動詞の語611例、名詞・形容動詞の語27例、形容詞の語13例）を得た<sup>12)</sup>。なお、「か」の用例について問いかけ性がないかどうかの確認作業は本稿執筆者の他に日本語教師1名にも行ってもらい、2人の判断が一致したものを採用した。

まず、問いかけ性を持たない反語形式「か」「ものか」に前接する語について、表1に「か」「ものか」に前接によく出現する動詞の語とその出現数を示し、表2に「ものか」に前接

によく出現する名詞・形容動詞の語とその出現数を示す。「か」には名詞・形容動詞、形容詞の語は前接せず、「ものか」に前接する形容詞の語は13例あるが2回以上出現する語はないため、これらは表としては示さない。

表1についてはそれぞれの形式の用例の総数に大きな違いがあるため、それぞれ表に示す基準が異なっている。「か」は2回以上出現している語、「ものか」は10回以上出現している語を示す。動詞が補助動詞の形式で出現しているものは、その語と出現数に括弧をつけて示している。

そして、表2については類義の語をまとめ、最も多く出現している語を示す。なお、表1、2とも同じ表現で仮名での表記と漢字での表記がある場合、仮名での表記に統一して示している。「か」「ものか」のどちらの形式の前接にもよく出現している語または補助動詞の形式には「たまる（てたまる）」「ある」「知る」「する」「できる」「わかる」（表内の実線の語／形式）といったものがある。「か」への前接には出現せず、「ものか」への前接にのみ出現している語または補助動詞の形式には「かまう」「やる（てやる）」「信じる」「言う」「嘘／でたらめ／でまかせ／冗談」（表内の波線の語／形式）といったものがある。一方、「ものか」への前接には出現せず、「か」への前接にのみ出現している語または補助動詞の形式には「食べる」といった possible の語を除いてほとんど存在しない。

次に、表3に「Pか」「Pものか」の直前・直後によく出現している表現とその出現数を示す。類義の表現をまとめ、2回以上出現している表現を示している。また、同じ表現で仮名での表記と漢字での表記がある場合、表内においては仮名での表記に統一して示している。

「Pか」の直前・直後にのみ出現している

問いかけ性を持たない反語形式 「か」「ものか」の用法

表1 「か」「ものか」に前接に出現する動詞の語とその出現数

「か」に前接する語 (括弧内は補助動詞の形式)	出現数 241例中	「ものか」に前接する語 (括弧内は補助動詞の形式)	出現数 611例中
<u>たまる</u> (てたまる)	64(64)	<u>ある</u>	105
<u>ある</u>	53	<u>する / させる</u>	75
<u>知る</u>	27	<u>たまる</u> (てたまる)	56(56)
<u>できる</u>	11	<u>なる</u> (てなる)	48(33)
<u>する / させる</u>	10	<u>かまう</u>	35
<u>わかる</u>	10	<u>わかる</u>	33
<u>いる</u>	7	<u>いる</u>	32
<u>食える</u>	5	<u>できる</u>	28
<u>なる</u> (てなる)	4(2)	<u>負ける</u>	23
<u>逃す</u>	3	<u>やる</u> (てやる)	22(21)
<u>入る</u>	2	<u>知る</u>	20
		<u>行く</u>	17
		<u>信じる</u>	12
		<u>言う</u>	10
		<u>くる</u>	10

表2 「ものか」に前接に出現する名詞・形容動詞の語とその出現数

「ものか」に前接する語	出現数 27例中
<u>嘘 / でたらめ / でまかせ / 冗談</u>	7

表3 「P か」「P ものか」の直前・直後に出現する表現とその出現数

「P か」の直前・直後に 出現している表現	出現数 241例中	「P ものか」の直前・直後に 出現している表現	出現数 651例中
<u>バカ / バカヤロー / 馬鹿者</u> 、など	17	<u>いいえ / いえ / いいや / いや</u>	13
<u>冗談じゃない</u>	5	<u>ウソ / ちがう / 間違いだ</u> 、など	10
<u>よしてくれ / よせよ</u>	3	<u>もちろんだ / もちろんよ / むろん</u>	7
<u>バカを言え / バカ拔かせ</u> 、など	3	<u>大丈夫だ / 平気さ</u>	6
		<u>ああ / そうさ / そうだ / その通りだ</u>	6
		<u>冗談ではない / 冗談じゃない</u> 、など	6
		<u>お断り / お断りしよう</u>	5
		<u>ばかをいえ / バカ言うな</u> 、など	3
		<u>なにくそ</u>	2

表現には、「バカ / バカヤロー / バカタレ / 馬鹿者」といった聞き手を罵倒する表現、「よしてくれ / よせよ」のように聞き手の行為を迷惑がる表現がある。「P ものか」の直前・直後にのみ出現している表現には、「いいえ

/ いえ / いいや / いや」といった否定の応答表現、「もちろん」「そうだ」「大丈夫だ / 平気だ」などの肯定的の応答表現、「ウソ / ちがう / 間違いだ」といった否認する際に用いる表現、「お断り / お断りしよう」といった

他者からの依頼（話し手が他者のために行うこと）を断る表現がある（表内の実線の表現）。

この表3に示した調査結果からは、「か」「ものか」のそれぞれの文脈での用法について次の(12)(13)のような予測ができる。

(12) 「か」は聞き手や他者が行った行為を叱責・非難するのに用いられる

(13) 「ものか」は聞き手や他者の話の内容などを否定・否認するのに用いられる

これらの調査結果をもとに、4節では「か」「ものか」の両形式への前接によく出現している語の用例から、5節では「ものか」への前接にのみ出現している語の用例から、それぞれ「か」「ものか」の文脈における用法を詳細に分析していく。

#### 4. 分析1—「か」「ものか」のどちらの前接にもよく出現している語の用例から—

この節では、「か」「ものか」のどちらの形式の前接にもよく出現している語として、表1内でどちらの形式にも上位に現れる「知る」「ある」「てたまる」を取り上げ、「か」「ものか」の文脈における用法を分析していく（「たまる」はすべて「てたまる」の形式での出現であるため「てたまる」として扱う）。「知る」については4.1で、「ある」については4.2で、「てたまる」については4.3で分析する。なお、これ以降の用例において「Pか」「Pものか」には実線の下線、「Pか」「Pものか」の直前・直後の表現には波線の下線、「Pか」「Pものか」が非難や否定する先行文脈の対象には点線の下線を示している。

##### 4.1 「知る」

「知る」が「か」に前接するのは241例中27例、「ものか」に前接するのは651例中20例ある。ここでは3節の表3に示した「Pか」「Pものか」

の直前・直後に出現している表現に着目し、両形式の文脈での用法を分析する。

「知る」が「か」に前接する場合、「Pか」の直前・直後に出現している表現には次のような特徴がある。

(14) 「Pか」の直前・直後に「もういい」「それくらい自力で見つけろ」「おれに聞くな」といった、会話の遮断や質問することそのものを非難するような表現の出現がある（27例中7例）<sup>13)</sup>

用例の文脈を見ていくと、「か」は聞き手が話し手に質問してきたときに「そんなことを質問するな」といったニュアンスで聞き手に対して用いられていることがわかる。それは聞き手の質問行為について、普通そのようなことについては質問しないという話し手の認識があるためである。つまり、聞き手の質問行為をおかしなことであるとし、聞き手を叱責・非難するのに用いられていると言える。

次の(15)では、聞き手からの質問（点線部分）に対し「んなもん知るか」（実線部分）と述べたあと、「それくらい自力で見つけろ」（波線部分）のように聞き手が質問してきたこと自体を嫌い、聞き手を非難する表現をしている。質問に対する回答を知っているか知らないかということは必ずしも話し手の発話に関係しない。ここで「か」と「ものか」を比較した場合「んなもん」という語句との共起から、「か」のほうがより自然に感じられる。

(15) こういうゲーム、会社のものは差し替えなくてははいけないとか決まりの様なものってあるのでしょうか？んなもん知る {か/?もんか}。それくらい自力で見つけろ。ネットで調べりゃいいだろ。

（『Yahoo! 知恵袋』2005）

一方、「知る」が「ものか」に前接する場合、「Pものか」の直前・直後に出現している表

現には次のような特徴がある。

- (16) 「P ものか」の直前・直後には聞き手を非難するような表現は出現せず、聞き手からの質問に対し何らかの回答を述べていたり、一緒に回答を考えたりする発話が出現している例がある（20例中4例）

用例の文脈を見ていくと、「ものか」は聞き手からの質問に対し「その答えを知っているわけがない」といったニュアンスを持ち、話し手はその情報を知っているという聞き手の期待を否定するために用いられていることがわかる。つまり、話し手はその情報を知っているという事態の成立を否定するのに用いられていると言える。

次の(17)では、聞き手からの質問（点線部分）に対し「そんなこと、知るものか」（実線部分）と述べたあと、その直後には「なにか手掛かりを残しているはずだ。その使いの紳士は、都築の身近にいる人間に違いない」（波線部分）のように聞き手の質問に対して何等かの情報を提示している。聞き手の質問行為を非難しているのではなく、聞き手の期待である、話し手はその情報を知っているという事態の成立を否定している。

- (17) 「[前略]だが、彼女に会うと、また拗れた問題が起きる。だから、使いの者にその金包みを持たせてやったんだ」「使いの者って、だれ…?」「そんなこと、知るもんか。だけど、なにか手掛かりを残しているはずだ。その使いの紳士は、都築の身近にいる人間に違いない。」[後略]

（水野泰治『歌麿殺人事件』）

以上、「か」「ものか」に前接する語が「知る」の場合、「か」は聞き手の質問に対し、普通そんな質問はしないと聞き手の質問行為を叱責・非難するのに用いられ、「ものか」は聞

き手の質問に対し、話し手は情報を知っているという聞き手の期待する事態の成立を否定するのに用いられる。

#### 4.2 「ある」

「ある」が「か」に前接するのは241例中52例、「ものか」に前接するのは651例中105例ある。ここでは「ある」のガ格名詞と、3節の表3で示した「Pか」「P ものか」の直前・直後によく出現している表現に着目し、両形式の文脈での用法を分析する。

表4は「か」「ものか」に前接する「ある」のガ格名詞（形式的な名詞を含む）とその出現数を表したものである。表には3回以上出現している語を示している。

「ある」が「か」に前接する場合にのみ出現しているガ格名詞には、表4内の語では「やつ／奴」「わけ」、そして方法を表す「～方（動詞連用形＋「方」）」（表4内の実線部分）である。一方、「ある」が「ものか」に前接する場合にのみ出現しているガ格名詞には、表4内の語では「はず」（表4内の波線部分）がある。

また、「Pか」「P ものか」の直前・直後によく出現している表現については、3節の表3でもその傾向が示されているように、「ある」が「か」に前接する場合と「ものか」に前接する場合では次のような特徴の違いがある。

- (18)a. 「Pか」の直前には「ばか／ばかやろ／馬鹿者」「こらこら」といった聞き手を罵倒したり、叱責したりする表現が出現している（52例中9例）

- b. 「P ものか」の直前には聞き手を罵倒する表現は1例も出現せず、「いや」「うそ」「ああ／いいさ／その通り」「もちろん」などの先行の情報否定したり、肯定したりする表現が出現している（105例中10例）

「ある」が「か」に前接する場合の用例の

表4 「か」「ものか」に前接する「ある」のガ格名詞とその出現数

「ある」が「か」に前接する 場合のガ格名詞	出現数 52例中	「ある」が「ものか」に 前接する場合のガ格名詞	出現数 105例中
やつ／奴	11	こと	30
こと	11	～も～も	17
わけ	4	話	10
～方（動詞連用形+「方」）	3	はず	6
～も～も	3		
話	3		

文脈を見ていくと、普通は起こるはずがない、誰もするはずがないと話し手が認識することを聞き手や他者が行ったときに、「そんなことは起こりもしないのに何を言っているのだ」「そんなことは誰もしないのに何をしているのだ」といったニュアンスで聞き手や他者を叱責・非難するのに用いられているのがわかる。つまり、聞き手や他者の行為をおかしなことであると認識し、叱責・非難するのに用いられていると言える。以下、「ある」が「か」に前接する場合にのみ出現しているガ格名詞のなかから「やつ／奴」の例と、「か」に前接する場合にも「ものか」に前接する場合にも出現しているガ格名詞のなかから「話」の例を示す。

次の(19)は「奴」がガ格名詞の例である。「宗茂が鮎の小骨を口の中でよりわけて手にとっている」（点線部分）という、男なら普通は誰もしないと話し手が認識することを宗茂が行っていたのを見て、宗茂を叱責するために「男子が、女子供のように、骨をよって魚を食う奴があるか」（実線部分）と述べている。また、「Pか」の直前には「馬鹿者」（波線部分）という宗茂を罵倒する表現が出現している。この例で「か」を「ものか」に置き換えると不自然になる。4.1で論じたように「ものか」が聞き手を叱責・非難するのではなく事態の成立を否定するものならば、「Pか」のPの事態は既に成立しており、その事態を行った

人物を非難する場面では「ものか」を用いることはできないからであると考えられる。

(19) ある日、食事のとき、宗茂が鮎の小骨を口の中でよりわけて手にとっていると、そばにいた道雪が、とつぜん大声をあげ、「馬鹿者。男子が、女子供のように、骨をよって魚を食う奴がある {か/??ものか}。男子ならば、頭から食べ、骨ごとかみくだけ。この立花家をつごうと思うなら、小魚一匹、丸ごと食うような根性がなくてはならぬ」と教えたという。

（徳永真一郎『島津義弘』）

次の(20)は「話」がガ格名詞の例である。聞き手からの「御用が済むまで酒はご法度です」（点線部分）という話は話し手にとってはあり得ないことであるため、それを言った聞き手に対し「普通そんなことは言わないだろう」と非難するために「そんな酷な話があるか」（実線部分）と述べている。「用が済むまで酒は禁止だ」という話の存在を否定するために述べているのではない。

(20) 「竹村さん、品川さん、給金は一人一日一両、仕事をうまくしおせれば応分の報奨が出ます」「坂崎さんの仕事は破格の実入りだ。たまらんな」「竹村さん、一つ約束してください。「御用が済むまで酒はご法度です」「な

にっ、そんな酷な話があるか」「約定

できぬとあらばこの話はなしです」

(佐伯泰英『朝虹ノ島－居眠り磐音江戸双紙－』)

次に、「ある」が「ものか」に前接する場合の用例の文脈を見ていくと、聞き手や他者から伝えられることの内容、ある状況から話し手自身が想像することの内容は話し手にとっては考えられないことであるため、その事態は成立しないと否定・否認するのに用いられているのがわかる。以下、「ある」が「か」に前接する場合にのみ出現しているガ格名詞「はず」の例と、「か」に前接する場合にも「ものか」に前接する場合にも出現しているガ格名詞のなかから「話」の例を示す。

次の(21)は「はず」がガ格名詞の例である。「(カイは) フクロウに食われて死んだ」(点線部分)という聞き手が伝える内容を、そのようなことは起こり得ないと事態の成立を否定・否認するために「カイが死ぬはずあるもんですか」(実線部分)と述べている。「P ものか」の直前には、聞き手情報を否認する「うそ」(波線部分)という表現が出現している。

事態の成立・存在を当然視していることを表す「はず」(日本語記述文法研究会(編)2003: 161<sup>14)</sup>)は、同じく事態の成立を否定・否認する「ものか」とは共起しやすいのだろう。

(21) あんたのさがしとるのは、夕焼けいろしたカイというこぞうじゃろ。だが、嬢ちゃん、カイはつかまらんぞ。ゆうべフクロウにくわれてしまった。もう、葬式がはじまるとるわい。—うそ。あたしはさげんだ。—カイが死ぬはずあるもんですか。どうしてそんなこというの。

(神沢利子『空色のたまごは』)

次の(22)は「話」がガ格名詞の例である。「子供の腕は押せども引けども、びくともしない」

(点線部分)という話を聞いた者たちが、そのようなことは起こり得ないと事態の成立を否定・否認するために「そんな馬鹿な話があるものか」(実線部分)と述べている。

(22) 「なにを、この餓鬼あ、けっ。」と着物の袖をたくし上げて相手になると、これはいかに、子供の腕は押せども引けども、びくともしない。そんな馬鹿な話があるものかと、物好きや力自慢が押しかけてきて、春駒は思わぬ大繁昌。

(三浦哲郎『三浦哲郎自選全集 第4巻』)

以上、「か」「ものか」に前接する語が「ある」の場合、「か」は聞き手や他者の行為や発話に対し、ありえない行為・発話であると叱責・非難するのに用いられ、「ものか」は聞き手や他者から伝えられることの内容や話し手自身が想像することの内容に対し、その事態は存在(成立)しないと否定・否認するのに用いられる。

#### 4.3 「てたまる」

「てたまる」が「か」に前接するのは241例中64例、「ものか」に前接するのは651例中56例ある。「たまる」は実際の使用ではもっぱら「たまらない」という否定の表現で用いられ、「この状態に堪えることができない」(『明鏡 国語辞典』初版<sup>15)</sup>)という意味を持つ。つまり、「てたまる」が「か」「ものか」に前接し、反語として用いられる場合、どちらも「堪えられない」という話し手の心的な状態を表すことになる。

ここでは3節の表3で示した「Pか」「Pものか」の直前・直後によく出現している表現に着目し、両形式の文脈での用法を分析する。

「てたまる」が「か」に前接する場合、「Pか」の直前・直後によく出現している表現には次のような特徴がある。

- (23) 「P か」の直前・直後に「バカ／ばかやろう／馬鹿野郎／阿保」「バカ抜かせ／馬鹿言え」「この餓鬼めが」などの聞き手を罵倒する表現、「よしてくれ」「冗談じゃない」「そうはいくか」といった聞き手の行為を迷惑がったり、聞き手の行為を阻止しようとしたりするような表現の出現がある(64例中17例)

用例の文脈を見ていくと、普通は起こるはずがないと話し手が認識することを聞き手や他者が行ったときに、そんなおかしな行為をされては堪えられないという話し手の心的な状態を、聞き手や他者に対して表していることがわかる。つまり、聞き手や他者の行為をおかしなことであると認識し、叱責・非難するのに用いられていると言える。

次の(24)では、「あんなことでいちいち会社をやめて」(点線部分)とあるように、話題となっている主婦が仕事を辞めた理由は、誰もそのようなことで会社を辞めはしないと話し手が認識することである。そんなことをされたらやっていられないという話し手の心的な状態を表してその主婦を叱責・非難するために「主婦の暇つぶしのために仕事なんかされてたまるか」(実線部分)と述べている。「P か」のPの事態は既に成立しており、その事態の成立を否定するために用いられているのではない。

- (24) 経済的理由でまだ小さい子供を預けてまで働かなければならない主婦、生活がかかっている会社員、あんなことでいちいち会社をやめてたら即、日干しになってしまう。皆生活かかってたり、本当に仕事をしたいから、じっと“おしん”になっているのである。主婦の暇つぶしのために仕事なんかされてたまるか。

(群ようこ『午前零時の玄米パン』)  
一方、「てたまる」が「ものか」に前接する場合、「P ものか」の直前・直後によく出現している表現には次のような特徴がある。

- (25) 「P ものか」の直前・直後に聞き手を罵倒する表現は出現せず、「いいえ」などの否定の表現、「そうだ」「むろん」といった肯定を表す表現、「お断りしようよ」といった聞き手からの頼みを断る表現などの出現がある(56例中9例)

用例の文脈を見ていくと、聞き手や他者から伝えられることの内容、ある状況から話し手自身が想像することの内容に対し、それが成立すると堪えられないことであるという話し手の心的な状態を表すことで、その事態の成立を否定・否認するのに用いられているのがわかる。

次の(26)は、戦場での独話である。危険な目に遭い、「ここでやられる」(点線部分)という想像が話し手自身に浮かぶ。しかし、戦場に出てきたばかりであり、そのようなことが成立するのは受け入れられないというニュアンスで話し手自身の想像を否定するために「そんなことがあってたまるものか」(実線部分)と発している。この文脈では叱責・非難する対象が存在していない。

- (26) 「だが、待ってくれ。俺はまだ前線へ出てきたばかりなんだ。まだ何もやっていない。戦争は始まったばかりで、本当の戦いはこれからなんだ。ここでやられるなんて馬鹿げている。そんなことがあってたまるものか！俺はまだ二十二歳だぞ！まだまだ死ねないんだ！」

(武田信行『最強撃墜王－零戦トップエース西澤廣義の生涯－』)

以上、「か」「ものか」に前接する語が「て

たまる」の場合、「か」は聞き手や他者が行った行為や発話に対し、普通考えられないことであり、それをされたらやっつけられないと叱責・非難するのに用いられる。「ものか」は聞き手や他者から伝えられることの内容や話し手自身が想像することの内容に対し、それが成立するのは受け入れられないと事態の成立を否定・否認するのに用いられる。

#### 4.4 この節の分析のまとめ

4.1から4.3までの分析をまとめると、「か」「ものか」の文脈における用法は3節での(12)(13)の予測通りであり、次のように記述することができる。

- (27)a.「か」は聞き手や他者が行った行為や発話に対し、普通考えられないことであるという話し手の認識を示し、叱責・非難するのに用いられる  
 b.「ものか」は聞き手や他者から伝えられることの内容、話し手自身が想像することの内容に対し、その事態の成立を否定・否認するのに用いられる

### 5. 分析2—「ものか」にのみ前接する語の用例から—

この節では、3節の表1、表2に示した「か」への前接には出現せず、「ものか」への前接にのみ出現している語である、「かまう」「やる(てやる)」「信じる」「言う」「嘘/でたらめ/でまかせ/冗談」といった語を取り上げ、「か」に前接する語として出現していない理由を考える。以下には代表として動詞「かまう」、名詞「嘘/でたらめ/でまかせ/冗談」を用いて考察する。

まず、「かまう」は「あることが気になって、気持ちがそれにとらわれる」(『明鏡 国

語辞典』)という話し手の心的な状態を表すが、実際の使用ではもっぱら「かまわない」という否定の表現で用いられる。反語文で「かまう」が用いられる場合、本来なら気にすることを気にしないという意味になる。つまり、話し手の心的な状態である「気にする」という事態の成立の否定を意味し、聞き手や他者は関係しない。そのため、普通考えられないと話し手が認識することを行った聞き手や他者を叱責・非難するのに用いられる「か」には前接しにくくなるものと考えられる。

次の(28)では、本来はその事態を成立させるとよくないと考える「無断で彼女を訪ねたと知ったら、あの先生はきっと怒る」(点線部分)を表したあと、「しかし今、ここではそれを気にとめない」という話し手自身の心的な状態を表すのに「かまうものか」(実線部分)と述べている。ここで「ものか」を「か」に置き換えると不自然になる。

- (28) 無断で彼女を訪ねたと知ったら、あの先生はきっと怒るだろう。だが、かまう ものか/?か。言われるままに、いつまでも悠長に待っているわけにはいかない。

(岡江多紀『鑑定主文』)

次に、「嘘/でたらめ/でまかせ/冗談」は反語文で用いられる場合、「嘘ではない/でたらめではない/でまかせではない/冗談ではない」という意味になる。「嘘である/でたらめである/でまかせである/冗談である」という聞き手の発話に対してそれを否定すること、つまり、聞き手が期待する事態の成立を否定するということになる。そのため、普通考えられないと話し手が認識することを行った聞き手や他者を叱責・非難するのに用いられる「か」には前接しにくくなるものと考えられる。

次の(29)では、「そんなでまかせを」(点線

部分)とあるように話し手の話はでまかせであると聞き手は考えている。その聞き手の考えを否定するのに「でまかせなものか」(実線部分)と述べている。ここで「ものか」に代えて「か」を用いることはできない。そもそも「か」には名詞・形容動詞・形容詞は前接しないのだが、それは名詞・形容動詞・形容詞の述語文は事態の状態性を表すからであろう。つまり、状態性の述語を反語により肯否を逆転させるということは事態の成立そのものを否定するということになるため、事態を起こした聞き手や他者を叱責・非難するのに用いられる「か」は用いることができないのである。

(29)「小判鮫?何だ、それは」「知らないのか。背中に小判みたいな形の吸盤がある小型の鮫だ。でかい鮫の餌のおこぼれにあずかろうと、その吸盤で貼りついているやつさ」「ふん、そんなでまかせを」「でまかせなものか/\*か」。ちゃんと農学校で習ったんだ」(斎藤純『銀輪の覇者』)

例には挙げられなかったが、そのほかの「ものか」への前接にのみ出現している動詞「やる(てやる)」「信じる」「言う」や名詞・形容動詞・形容詞の語、また、ほとんどの例が「ものか」への前接で出現する動詞「なる(てなる)」「負ける」についても同様の説明が可能である。これらの語は反語文で用いられた場合、聞き手や他者から伝えられることの内容、話し手自身が想像することの内容に対し、その事態の成立を否定・否認する意味となる。そのため「か」には前接しにくくなるのだと考えられる。

## 6. 「か」「ものか」の違いが分かりにくい場合の理由

この節では、問いかけ性を持たない「か」と「ものか」の置き換えが可能で、両形式の違いが見えにくい場合についてその理由を考察する。

本稿ではここまで、文脈における用法という観点から「か」「ものか」の違いを次のように論じてきた。次の(30)は4.4の(27)の再掲である。

- (30)a.「か」は聞き手や他者が行った行為や発話に対し、普通考えられないことであるという話し手の認識を示し、叱責・非難するのに用いられる  
b.「ものか」は聞き手や他者から伝えられることの内容、話し手自身が想像することの内容に対し、その事態の成立を否定・否認するのに用いられる

このことから、次の(31)のような条件が文脈に表されていれば、「か」「ものか」のどちらを用いるべきかという判断がしやすいということになる。

- (31)a.【「か」を用いると判断しやすい場合】  
普通考えられないと話し手が認識する行為を聞き手や他者がすでに行った事態が対象で、話し手がそれらを普通は考えられない行為・発話であると叱責・非難する場合  
b.【「ものか」を用いると判断しやすい場合】  
話し手自身が想像する内容が対象の場合、または聞き手や他者から伝えられる内容が対象で、話し手がその事態は成立しないと否定・否認する場合

しかし、(31b)のような文脈の場合であっても、次の(32)のような場合は「か」と「ものか」のどちらの形式でも用いることができるようになり、両形式の違いが見えにくくな

る。

(32) 文脈に聞き手や他者から話し手に伝えられたことの内容が、話し手の認識では未成立のため話し手はその事態の成立を否定・否認でき、かつ、聞き手や他者が話し手に伝えてきた行為・発話そのものを普通考えられないことだと叱責・非難できる場合  
たとえば、この場合に該当する例として、次の「ある」が「ものか」に前接する例を示す。この例では、「ブッダはお肉を食べられたか」(点線部分の一部)という質問の内容について、その事態の成立を否定するのに「ものか」が用いられている。しかし、「ブッダはお肉を食べられたか」という発問(点線部分)に対しこのような質問をするのは普通考えられないことだと話し手が認識すれば「か」を用いることも可能である。「ものか」を「か」に置き換えても自然である。

(33) 「ブッダはお肉を食べられたか」という少しくショッキングともいえる発問に対して、敬虔なわが国の仏教徒たちのなかには「そんなことある」ものか/か」と反論する人がいるかもしれない。

(阿部慈園『インド仏教文化入門』)

## 7. まとめ

本研究では、問かけ性を持たない反語文全体の枠組みとして、真偽疑問文や補充疑問文の形式で問かけ性を持たない「か」と「ものか」について、その2形式の性質の違いを文脈における用法という観点から論じた。その際の分析の方法として、「か」「ものか」に前接する語、「Pか」「Pものか」の直前・直後に出現する表現に着目した。その結果、「か」「ものか」のそれぞれの特徴と、「か」「ものか」の置き換えが可能で違いが見えにくくなる場合の理由について以下のような結論に達した。

「か」の置き換えが可能で違いが見えにくくなる場合の理由について以下のような結論に達した。

(34) 【「か」「ものか」の文脈での用法】

- a. 「か」は聞き手や他者が行った行為や発話に対し、普通考えられないことであるという話し手の認識を示し、叱責・非難するのに用いられる
- b. 「ものか」は聞き手や他者から伝えられることの内容、話し手自身が想像することの内容に対し、その事態の成立を否定・否認するのに用いられる

(35) 【「か」「ものか」違いがわかりにくい場合の理由】

文脈に聞き手や他者から話し手に伝えられたことの内容が、話し手の認識では未成立のため話し手はその事態の成立を否定・否認でき、かつ、聞き手や他者が話し手に伝えてきた行為・発話そのものを普通考えられないことだと叱責・非難できる場合  
2.1で示した例文(10)(11)のように、ある特定の事態において、主体の人称が3人称の場合「か」の使用が不可能になり、主体の人称が1人称の場合「か」の使用が可能になるという現象が存在する。

(36) 「それで、彼は出された料理をたべたの？」

「{a. 食べるもんか / b. ?? 食べるか}」

(本稿(10)再掲)

(37) 「それで、あなたは出された料理をたべたの？」

「{a. 食べるもんか / b. 食べるか}」

(本稿(11)再掲)

この現象は(34)の「か」「ものか」の文脈での用法の違いによって説明可能である。「ものか」が事態の成立を否定・否認するもので

あるのに対し、「か」は普通考えられないことであるという叱責・非難をする話し手の心的態度を表すため3人称の主体では使用が不可能となるのである。

## 付記

本研究は JSPS 科研費20K13094の助成を受けたものです。

## 注・参考文献

- 1) 日本語文法学会（編）：日本語文法辞典、大修館書店、東京、2014
- 2) 日本語記述文法研究会（編）：現代日本語文法4 第8部 モダリティ、くろしお出版、東京、2003
- 3) 案野香子：現代日本語反語の専用形式「たまるか」「ものか」「(人名詞)があるか」、大阪府立大学言語文化科学研究言語情報編、9、53-69、2014
- 4) 井上直美：「Vてたまるか」の意味・機能について－「Vるものか」との比較から－、さいたま言語研究、5、1-12、2021
- 5) 安達太郎：疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き、京都橘女子大学研究紀要、31、35-50、2004
- 6) 国立国語研究所：現代語の助詞・助動詞－用法と実例－（国立国語研究所報告3）、秀英出版、東京、1951
- 7) 松村明（編）：日本文法大辞典、明治書院、東京、1971
- 8) 山口佳也：「ものか」の反語文について、十文字学園女子大学短期大学部研究紀要、35、50-41、2004
- 9) 塩塚香織・江口正：文末表現「モノカ」についての考察、福岡大学日本語日本文学、16、264-249、2006
- 10) 国立国語研究所：現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言版）
- 11) 用例の抽出は検索ツール「中納言2.4、データバージョン1.1」の短単位検索を用いた。「か」の検索条件は、キーを品詞「動詞」And 活用形「終止形」/語彙素「させる」/語彙素「せる」/語彙素「られる」/語彙素「れる」、後方共起1語を品詞「助詞-終助詞」And 語彙素「か」、後方共起2語を語彙素「。」/語彙素「!」/語彙素「」とした。「ものか」の検索条件は次の2つとした。1つは、キーを品詞「動詞」And 活用形「連体形」/語彙素「させる」/語彙素「せる」/語彙素「られる」/語彙素「れる」/品詞「助動詞」And 活用形「連体形」/品詞「形容詞」、後方共起1語を語彙素「物」、後方共起2語を品詞「助詞-終助詞」And 語彙素「か」とした。もう1つは、キーを品詞「動詞」And 活用形「連体形」/語彙素「させる」/語彙素「せる」/語彙素「られる」/語彙素「れる」/品詞「助動詞」And 活用形「連体形」/品詞「形容詞」、後方共起1語を語彙素「物」、後方共起2語を語彙素「です」、後方共起3語を品詞「助詞-終助詞」And 語彙素「か」。国立国語研究所：コーパス検索アプリケーション中納言 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)（最終閲覧日：2022年7月27日）
- 12) 出現形式が「ものか」であっても、「ものだろうか」と置き換えが可能な場合は問いかけ性を持つ。次の(i)のような例は「ものか」が「ものだろうか」に置き換えが可能なため本研究の対象から外れる。
  - (i) 社長というのは、自分が社長になった瞬間から、後継者を考えなければいけないといわれるが、それについて伊藤は、「よく、そういわれますし、私もそのとおりでと思う

んですが、だからといって、社長  
だけで決めていい ものか/ものだ  
ろうか。 (佐高信『逆命利君』)

- 13) 問かけ性を持たない「か」に前接する「知る」の語義は、「知る」の中心的な意義からは離れたものになる。「知る」「分かる」の多義性を分析した生天目・高原・砂川(2017)では「知る」の語義の1つとして「関わりの拒否」が示されている。この語義が問かけ性を持たない「か」に前接する「知る」の語義に相当するものと思われる。生天目知美・高原真理・砂川有里子：多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分け：コーパスを活用した類義語分析、国立国語研究所論集、12、63-79、2017
- 14) 日本語記述文法研究会（編）：現代日本語文法4 第8部 モダリティ、くろしお出版、東京、2003
- 15) 北原保雄（編）：明鏡 国語辞典 初版、大修館書店、東京、2002

